

知的刺激にあふれた研究会をめざして

—3 つの活動方針—

堀恵子 (2017-2018 会長)

1. 3 つの活動方針

2017 年から 2018 年の活動方針に、次の 3 点を掲げた。

1. OPI の実践、OPI に関連した研究に触れ、知的刺激にあふれた研究会とする
2. テスターの技術向上と資格継続に役立つ場とする
3. 研究会活動にいろいろな形で参加しやすい研究会にする

方針 1 には、研究会の名にふさわしく、単に OPI の技術向上を目指すだけでなく、OPI の根底にある考え方や、言語習得、OPI を応用した教育実践に関わる最新研究に触れ、会員自身の教育・研究活動にも資するよう多方面の講師を招きお話しを聞くことを掲げた。OPI 研究会の重要な柱として OPI 技術の向上があることは当然であるが、言語教育に携わる会員が評価、口頭表現能力、言語習得などに関する最新研究を深く理解することで、OPI に対する理解もより深まると考えた。

方針 2 には、日本語 OPI 研究会発足時から続けてきたブラッシュアップセッションを継続して行い、あわせて資格更新などの情報も共有することを挙げた。

方針 3 には、会員の利便性を高めるために web 会議ツール zoom を使って研究会を同時配信し、来場できない会員も参加できるようにすることを挙げた。これは、後にコロナ禍に際して、スムーズにオンライン開催へとつながることになった。

2. 研究会とその他の活動記録の概要

この章では、研究会の定例会および一般公開講演会でお招きした講演者の方々の内容を短くまとめ、そこから得られた示唆を短く紹介する。

2.1 2017 年 7 月定例会

一般社団法人 Global8 の八木智裕氏による講演「コミュニケーションテスト OPIc のご紹介～ Oral Proficiency Interview – computer～」

Oral Proficiency Interview computer(OPIc)について、テストの概要や受験方法、諸機関での実施状況などに関する紹介をされた。英語ではすでに 100 カ国以上、150 万人を越える受験実績があり、学習、留学、キャリアアップなどに「つながり」のあるテ

ストであることが示された。今後日本語テストの利用拡大が期待される。

2.2 2017年8月 一般公開講演会 牧野成一先生講演「OPIの過去・現在・未来ー日本語 OPI 研究会の歩みとともにー」

OPI 研究会立ち上げ時から関わってこられた牧野先生から、日本での OPI の過去かれこれまでの歩みと、未来に向かっての新たな「卓越級」の説明、教育への応用、今後の展開などについて幅広くお話を伺った。後半は会長がいくつかの質問をし、さらに会場の参加者との質疑応答が行われた。

2.3 2017年12月定例会

迫田久美子先生講演「日本語学習者の安全な誤用と危険な正用ー学習者コーパス I-JAS からわかる環境要因ー」

学習者コーパス I-JAS の概要の紹介と、ロールプレイのデータから明らかになった言語習得の特徴を説明された。具体的には、外国語環境と第二言語環境における習得の違い、および教室学習環境と自然環境とにおける習得の違いについて、言いさし、依頼表現に着目した研究に関するお話しを伺った。コーパスデータを用いて実態を知ることの重要性と、ロールプレイ、教室指導への示唆も得ることができた。

2.4 2018年3月 OPI 国際シンポジウム（2017年8月於台湾 淡江大学）の報告と助成プロジェクト報告

会員が2017年度国際シンポジウムで行った発表を共有し、各会員の今後の OPI 技術の向上や研究へのヒントとなることを目指した。また、助成プログラムの進捗状況についての報告も行われた。

2.5 2018年7月定例会

奥村三菜子先生御講演「評価と実践をつなぐーCEFR が示す「ことばの力」とは？ー」

CEFR の成り立ちからその理念を紹介し、学習者を social agents と捉える行動中心アプローチをわかりやすく解説していただいた。また、私たちの日々行っている評価が、学習者・教師・コースの理想を反映したものとなっているか、授業実践とつながっているか、受験者へのフィードバックは適切かを再考し、改めて点検する機会となった。評価の目的と実践につなぐことについての示唆を得た。

2.6 2018年8月 公開講演会

義永美央子先生講演「第二言語学習者の発達の可能性を探るーダイナミック・ア

セメントの理論と実践ー」

ヴィゴツキーの理論に基づく評価方法として、ダイナミック・アセスメント(DA)を紹介された。さらに、介入的 DA、相互行為的 DA、コンピュータを用いた DA、教室での DA、「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント」などを紹介し、従来のテストとの違いをわかりやすく説明された。最後に課題として、手続きの妥当性・信頼性の確立、DA を使う側である教師の養成の必要性などを示された。測定的評価だけでなく評価に関する講演で、新たな認識を得ることができた。

2.7 2018 年 12 月定例会

パネルディスカッション「『できる日本語』の実践と評価」コーディネーター：嶋田和子先生、登壇者：大崎晃史先生、高見彩子先生、落合知春先生

嶋田先生より『できる日本語』の理念を『OPI マニュアル』に基づいてわかりやすく紹介された。タスク先行型でまずチャレンジし、学習者自身が「できる」ようになるために学ぶべきことを認識した上でその課の学習に臨み、『できる』ようになったかどうかを振りかえる。また、トピックは学習が進むに従ってスパイラルに展開される。続いて『できる日本語』を使用している 3 つの日本語学校における実践と評価、学習者のふり返し活動などについて、具体的に紹介された。Can-do に基づいたアプローチがよく理解でき、会員それぞれの教育実践に生かせるお話しであった。

2.8 2019 年 3 月定例会

深澤のぞみ先生講演「21 世紀に必要な学びとしてのパブリックスピーキング」

パブリックスピーキングとは、ある程度改まった場所で一人の話し手が複数の聴衆に自分の考えを論理的にまとめて伝えることである。学習者がスピーチ指導を通して日本語力を伸ばすことができる一方、評価や聴衆のあり方には課題があることも示された。「ビブリオバトル」の分析から、効果的な説得とは、話し手と聞き手の共通認識を起点とし、色々な方法で聴衆に何度も想起させ、最後に新たな認識を示すことで深い印象を残すことであるとのお話があり、会員にとって多くの示唆を得た。

3. 2 年間の活動をふり返って

各分野の第一線で活躍されている講師の方々の講演を通して、評価にも OPI だけでなく色々な立場があり、教育理念・教育実践と密接に結びついたものであることを知ることができた。多くの知的刺激を得、自らの教育実践、評価活動を振りかえるきっかけとなった。今後の会員の教育・研究活動にも資するものであったと考える。